

# 令和7年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【大宮小学校】

⑥	次年度への課題と学力向上策
知識・技能	全体的には、よく定着している。しかし、個別に支援が必要な児童もいるので、その児童へのサポートをしていく必要がある。普段の授業からの支援方法を考え、ICTも有効活用しながら全体の底上げを図っていききたい。次年度の学習状況調査や日頃の成果物等の結果を比較しながら改善できているかを検証していきたい。
思考・判断・表現	答えはわかっているものの、自分の言葉で説明する力に課題があることが考えられる。そのため学習過程の中で、協働的な学びの時間を意図的に設定し、ICTも効果的に取り入れて児童同士が互いに意見交換をし合いながら学習を進めていく場を増やしていく。また、児童同士で説明をし合う場面を作れるように、発問や授業展開を工夫し、学習を進めていけるようにしていきたい。

①	今年度の課題と学力向上策	
	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<学習上の課題> 全体的に基礎的な知識や技能は定着率が高いが、個人差がある。 <指導上の課題> 個に応じた指導をして、学力の底上げをする必要がある。そのため時間を捻出することも必要と考える。	⇒ 授業の最初に、前時の振り返りをし、知識や技能の復習をする時間を確保する。【毎時間】 ICT教材、漢字ドリル、計算ドリル等を活用し、課題の見える児童への個別支援をし、苦手を克服できるようにする。【単元ごと】
思考・判断・表現	<学習上の課題> 答えはわかっているものの、自分の言葉で説明する力に課題がある。 <指導上の課題> 学習過程の中で、協働的な学びの時間を意図的に設定していく必要がある。児童同士で説明をし合う場面を作れるような授業展開を充実させたい。	⇒ ICTを効果的に活用し、意図的に協働学習の機会を取り入れていく。【単元に1度】 一斉指導で共有する前に、児童同士で考えを話し合い、それをもとに共有、まとめ、振り返りにつなげていく学習の流れを設定していく。【思考を評価する授業において】

⑤	評価(※)	調査結果	学力向上策の実施状況
知識・技能	B	①結果分析(管理職・学年主任等) ②詳細分析(学年・教科担当)	毎時間の振り返りは、各教科において各教員が意識的に取り組むことができている。ドリルやICT教材は反復学習の一環として積極的に活用できている。ICT教材については学年の実態に応じてよく活用することができている。特に低学年においてより多く活用できている。
思考・判断・表現	B	①結果分析(管理職・学年主任等) ②詳細分析(学年・教科担当)	協働学習については、「総合的な学習の時間」を中心に、取り入れる機会が増えた。個人で、グループで等の学習の仕方を児童が選択し、ICTの共同編集機能や、共有機能を使いながら学習を進める機会が増えた。思考のサイクルを繰り返すことで、児童が自分たちで考えて学習することができるようになってきた。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	どの教科も全国平均正答率と比較して、よい結果となっている。全国的に正答率が低いものに対しては本校でも低めの正答率となっている。理科の「エネルギー・粒子」の身の回りの金属について、電気を通す物、磁石に引き付けられる物があることの知識の定着を問う問題に課題が見られた。実際に学習では取り扱う内容だが、同事象に関連することについて実際に経験や体験をする機会が生活の中でも少ないのではないかと考えられる。学習内容と生活を結び付けるような工夫が必要ではないか。
思考・判断・表現	どの教科も全国平均正答率と比較して、よい結果となっている。全国的に正答率が低いものに対しては本校でも低めの正答率となっている。国語の「読むこと」について、目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けることができるかどうかをみる問題は課題が見られた。また、算数の「データの活用」について、目的に応じて適切なグラフを選択して出量の増減を判断し、その理由を言葉や数を用いて記述できるかどうかをみる問題に課題が見られた。どちらも資料の読み取りに関わってくる問題なので、他教科でも意図的に分析するような機会を増やしていく必要があると考える。

①結果分析(管理職・学年主任等)  
②詳細分析(学年・教科担当)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	知識・技能については全学年全教科について概ねよい結果となっている。しかし、6年社会の設問1の(2)「郵便局と畑の地図記号を理解している。」や、6年理科の設問3の(3)「物は、水に溶けると液全体に広がることを理解している。」、設問7の(2)「火山の働きでできた層の特徴を理解している。」は正答率が低かった。現学年以外の学習内容も含まれているので、単元で終わりでなく継続した指導をしていく必要があると考えられる。
思考・判断・表現	思考・判断・表現については、全学年全教科において、昨年度と同程度に概ねよい結果となっている。その中で小6算数の設問15「示された場面において、複数の数量から必要な数量を選び、立式することができる。」や、小5理科の設問4「『かげの観察記録』を基に、木の影の長さの変化をグラフに表し分析することができる。」は正答率が低かった。共に複数の条件から答えを導く設問なので、普段の授業でも応用力を身に付けられるような設問や授業展開を組み込んでいくことが必要であると考えられる。

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	B	毎時間の振り返りは、各教科において各教員が意識的に取り組むことができている。ドリルやICT教材は反復学習の一環として積極的に活用できている。ICT教材については学年の実態に応じてよく活用することができている。	一定の成果ありと捉えて、これまでの学力向上策は変更せず。 ②の分析考察から、学習と生活をより繋げられるような授業の展開を目指していく。【単元ごと】
思考・判断・表現	B	1学期は、ICTを活用した協働学習は、クラスや教科によって活用に差が見られた。児童同士で考えを話し合ってから共有、まとめにつなげる流れはおおむね取り組んでいる。今後、さらに協働学習を充実させ、思考力等の向上を図っていく。	これまでのものの十分に実施できていないので変更せず継続する。 ②の分析考察から、図表やデータ活用を使っている。今後、さらにデータの読み方の積み重ねを図っていく。【単元ごと】

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)